Japanese Association for Religious Studies



領域の広がりをもっており、しかも意識の多層とリアリティの多層のあいだには、一対一の対応関係が成り立つと井筒は考えた。さらに第三の特徴として、彼は意識の深化のための方法的組織的な修行の存在を挙げた。意識の深層を開くための修行として、彼は坐禅やヨーガなどに注目した。このように井筒は、存在の深みを含む多層的構造こそが真の「現実」であるとし、井筒「東洋哲学」の構築をめざして、神秘主義の構造を意味論的に論じた。

彼によれば、言語は元来、「意味分節」を本源的機能とする。「現実」は無数の語（コトバ）によって現象する意味の網目構造をなす。ところが言語は、形而上学的思惟の極限（「意識と存在のゼロ・ポイント」）に位置する神秘主義的な存在体験について、その意味指示的有効性を喪失する。「意識と存在のゼロ・ポイント」において、「形而上的なるもの」それ自体は絶対無分節かつコトバ以前である。しかし、哲学的思惟は井筒「東洋哲学」の視座からみれば、絶対的意味無分節たる「形而上的なるもの」それ自体を「全存在界の窮極の始点（アルケー）」としながら意味分節的なリアリティを言説しようとする。それはまさに井筒のいう「神秘哲学」として、神秘主義的な存在体験のロゴス化であると同時に、言語意味論的な世界観学としての言語哲学であった。つまり、井筒「東洋哲学」は神秘主義を哲学的思惟の始点（アルケー）として、その哲学の基盤へと組み込むことによって、神秘主義と哲学の本質構造的連関を意味論的に明らかにしたと言えるであろう。

## 第六部会

# 『雑阿毘曇心論』業品における無間業の最大罪と最大果について

智谷公和

『雑阿毘曇心論』(Saṃyuktābhidharma-hṛdaya-śāstra, 大正蔵経 No. 1552, 以下『雑心論』と略す）業品（Karma-nirdeśa）における、無間業の最大罪と最大果が説かれている偈と長行は、一七一偈とその長行である。それらの偈と長行は、大正蔵経二八巻八九九頁中段一一行から下段五行までである。

この偈と長行を取り上げることによって、無間業の最大罪と最大果について論述していきたい。論述方法は、『雑心論』と玄奘訳『倶舎論』や、この漢本に相応するプラダン本の梵文を参照し、『称友疏』等を対比させて、また、『順正理論』も参考にしながら、無間業の最大罪と最大果について、述べていくものである。

『雑心論』の無間業における最大罪と最大果が説かれている一七一偈は、「妄語もて僧を破壊（はかい）するは、諸の業に於て最悪なり。第一有中への思は、是を最大の果と説く。」これを一七一偈とその長行を参照して解釈してみれば、「妄語（mṛṣā-vada）によって僧が教団を破壊するのは、もろもろの業において最も重罪（mahā-sāvadya）である。善（śubha）の業について第



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies



一有である非想非非想処（naiva-saṃjñā-nāsaṃjñā-āyatana）の報果（vipāka-phala）を成じる思が、世善中の最大の果（mahā-phalatama）を招くと説く。」とされる。このように無間業の最大罪は破和合僧とされ、世間の善の最大果は、非想非非想処の報果を成じる思とする。それらの理由として一七一偈の長行には、「これを最悪となす。法身（dharma-śarīra）を転ぜず以ての故に。」（大正二八巻八九九頁中段一五行から一六行）。「未だ超昇離生せざる者は超昇離生せず、亦、得果も無く」（中段二〇行）と述べ、最大罪として破和合僧は、仏の法身を転ぜず、世間の解脱の道を障するによってである。また、「彼の思は永く一切の煩悩を断じて得果するを以ての故に。」（大正二八巻八九九頁中段二九行から下段一行）と述べ、最大果としての非想非非想処は、八万大劫の間、得果して極寂静であるによってである。『倶舎論』で『雑心論』の相応するのは、業品一〇七偈とその長行（大正二九巻九四頁中段二行から二〇行）である。この漢本に相当するプラダン本の梵文（『AK』）は、二六四頁二行から一九行である。また梵文『称友疏』（萩原本『AKV』）では、四三〇頁五行から一六行である。『倶舎論』漢本と梵本とも、『雑心論』と相違しない。ただ無間業の罪の重さを、順序だてて説明している。「余の無間の罪は其の次第の如く。五と三と一と、後後に漸に軽く、第二は最も軽し。恩等少きが故に。」（大正二九巻九四頁中段一〇行から一二行）。このように、破和合僧が無間業中で最も罪が重く、次いで第五の出仏身血、第三の殺阿羅漢、第一の殺母の順で軽くなり、第二の殺父は恩等が少ないので最も軽いとされる。『順正理論』は「無間地獄の一劫の異熟を招く。」（大正二九巻五九〇頁上段九行）と延べ、『雑心論』の「法輪を転ぜず」の補足をしている。

以上のことから『雑心論』『倶舎論』には述べられていないが、なぜ異熟果に約す最大果を説いたのか、と言えば、『順正理論』には「これを簡ばんがための故に、世の善の言を説く。」（大正二九巻五九〇頁上段二〇行）と延べ、第一有を簡ぶために説いた、とされる。なぜなら離繋果に約せば阿羅漢に達する、金剛喩定と相応する思が異熟果に約すと第一有の思であって、最大の果を招くからである。またなぜ破和合僧が無間業（ānantaryaṃ karma）の最大罪と説いたのか、については、無間業は業障（karmāvaraṇa）のことであるから、聖道や善根の起るのを妨ぐ重大な障害であることを示すため、最大罪として破和合僧（saṃgha-bheda）を述べたのであろう。

## 古代インドにおける支配について
### ――vaśa と vasa――

杉岡信行

バラモン教と紀元前五・六世紀の仏教・ジャイナ教興起時代の思想中で、ヴェーダ語・サンスクリット語の vaśa とパーリ語・半マガダ語の vasa と、これらの派生語・複合語とが使用されている文脈に検討をくわえる。

『リグ・ヴェーダ讃歌』の第一〇巻、第一九〇讃歌はタパス（熱力）の歌である。その第二詩を引用する。「浪だつ大海より



NII-Electronic Library Service